こころ便り

第254号

令和3年5月

〒679-4343
兵庫県たつの市新宮町大屋六六八-十二
株式会社 新宮運送グループ
代表／木南 一志
kiminami@shingu.co.jp
電話 0791・75・1212

新宮運送ホームページ

捨てること

三度目の緊急事態宣言。真剣に受け取っている人はどれくらいいるだろうか。緊急という言葉が示す慌ただしさを感じる対応はほぼない。地方自治体の要請を受けて国の担当大臣が発表するという手続き主義。法律に基づいて国民の生命と安全を確保するためという目的に、緊急事態という緊張感よりも店の閉店やイベントの無観客という仕組みだけが実行されていく。三度も重ねてきた経験は活かされてきているかと振り返ると、国民のボヤキばかりが聞こえてくるように思えて仕方がない。しかし、一方では重症化した患者が毎日のように最愛の家族に会えないまま亡くなり遺骨になっていくという事実がある。

緊張感のない我が国の平和ボケがここにもはっきりと出てきている。

立法府という国会は、憲法改正に真剣に向き合いもせず、週刊文春の揚げ足取りに終始している。週刊誌の編集長に議長を務めてもらえばどうかと叫びたくもなる。「台湾の有事は、尖閣の有事」と記事にはあったが、尖閣ってどこの国のことなのだろう。正しいことを議論せず、選挙と票集めに終始しているすべての政党に国を守ろうという気概は見られない。

そして、国民も同じだ。有事の際に命を懸けても国を守るかというアンケートに「ハイ」と答えたのはわずか10％で、いちばん多かったのは80％の「わからない」となっているそうだ。火事になったら火を消すのは消防署の仕事で泥棒を捕まえるのは警察の仕事。確かにその通りだが、ボヤで済むなら自らが消す行動を起こすべきで、119番通報が先ではあるまい。泥棒が走って逃げているのなら大声を出すことぐらいはできるのではないか。尖閣を守るのは自衛隊ならば、憲法にハッキリと自衛隊を明記せよ。

考えなくてはならないことがあるはず。時代の変化と共に大きく変わってきた対応を「前からそうだった」とか「自分の担当ではない」と言って知らぬ顔を決め込むことで、「自分だけは安全」など保障はされていないのだ。

若い頃、消防団の機動分団でサイレンが鳴ると同時に火事現場に走った幼なじみが旅立った。弊社の配車担当係長で優秀なドライバーでもあった鍛治里志君が54歳という若さで旅立った。ともにガンであった。また、寺田一清先生、村上和雄先生、頼経健次さんも旅立たれた。わずか三週間足らずの訃報である。

何が正しいことなのかを常に意識しながら、余分なことを捨てていくことでハッキリさせるのは自分自身の役割だ。役に立てる人でありたい。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拝

尋常小學修身書 巻六 兒童用

第十三課 共同（つづき）

五人の庄屋は、仲間の庄屋たちと一しよに村の人々を指圖して、いよ〳〵工事にとりかゝりました。監督に來た藩の役人は、もし計畫通りに行かなかつたら、ふびんながら五人を重く罰すると、改めて言渡しました。工事に集つた人々は口々に、「五人の庄屋を罪に落してはすまない。」と言つて、夜晝一生けんめいに働き、女・子供までも手傳つて木や石を運びました。

それで、さしもの大工事も意外にはかどり、大きな堰が出來上りました。果して五人の庄屋の計畫通りに、筑後川の水がどん〳〵と掘割に流れ込みました。その時の人々の喜はたとへやうもありませんでした。

此の成功を見て、外の村々でも水を引きたいと願ひ出たので、また此の堰と掘割をひろげることになりました。はじめ工事に反對した庄屋も、今度は水の分前にあづかりたいと願ひ出ました。先に願ひ出た庄屋たちは「あの人々は工事に反對したのですから、我々の村に水が來るまでは、さしひかへさせて下さい。」と申し立てましたが、五人は「此の企はもと〳〵此の地方の人を救ふためですから、同時に願をお許しになるやうに。」と言つたので、役人もそれに同意しました。

これまで水が少くて作物のとれなかつた此の地方が、收穫の多い仕合はせな土地になつたのは、此の五人の庄屋が心をあはせ必死になつて力を盡したおかげです。

NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。